慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	表象としての民族衣装 : インド, アルナーチャル・プラデーシュのモンパの事例から
Sub Title	Ethnic dress as representation : a case study of the Monpas of Arunachal Pradesh, India
Author	脇田, 道子(Wakita, Michiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2009
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.68 (2009.) ,p.35- 58
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000068-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

表象としての民族衣装

――インド，アルナーチャル・プラデーシュのモンパの事例から――

Ethnic Dress as Representation

—A Case Study of the Monpas of Arunachal Pradesh, India—

脇　田　道　子*

Michiko Wakita

The Monpas of Arunachal Pradesh state in northeast India live in the area bordering Bhutan and China (Tibet).

Identical or comparable ethnic groups are also living in both of the bordering countries, but in India the Monpas are now one of the "Scheduled Tribes" recognized under the Constitution, and they are the major ethnic group in the area. This paper focuses on the ethnic dress of the Monpas and discusses how their dress represents the Monpas and also reflects the local politics surrounding them.

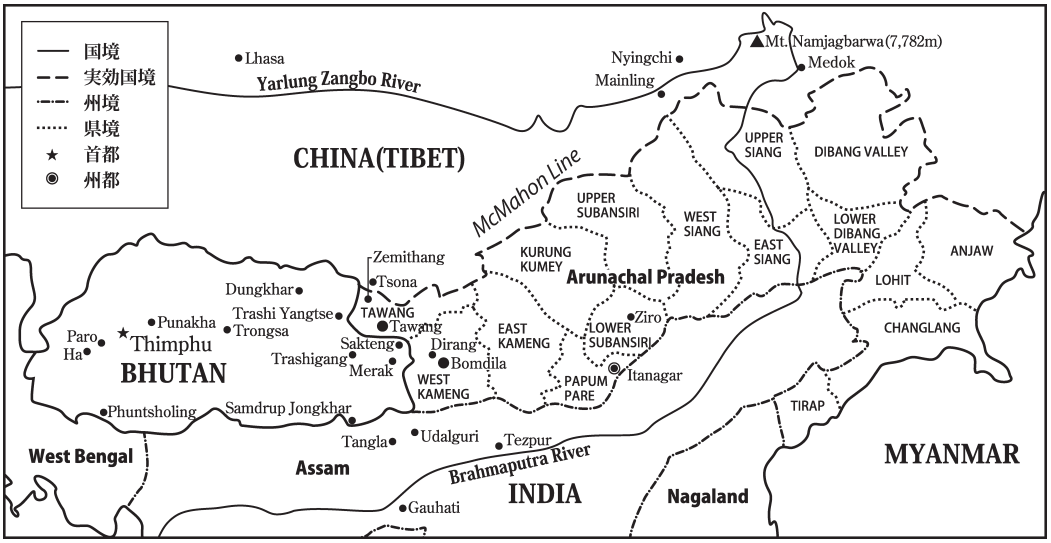
The Monpas can be divided into various groups by geographical location, origin and language, but in the main their women all wear striped deep-red-and-white tunics (*shingkha*) and the same color jackets (*tudung*) as their "traditional" ethnic dress. The Brokpas of Merak and Sakteng in Bhutan, near the Indian border, share the same dress. The materials from which they are made, wild silk and red dyestuff (*lac*), are not available in either area, however. According to my research, the Monpas may have started to wear their present dress only around 80 to 90 years ago, with both the materials and the dresses themselves entering Arunachal Pradesh from eastern Bhutan and Assam through traditional trade routes. How did they come to adopt non-local costumes as their ethnic dress?

Today, both their tunics (*shingkha*) and their hip aprons represent the Monpas' ethnic identity. The neighboring ethnic groups also wear tunic- style dresses but only the Monpas wear aprons over their hips. Through this fact, I attempt to demonstrate how the Monpas' dress has changed under the influences of local politics and both economic and cultural hegemonic power, and how the Monpas adapted their dress of their own volition during the course of their history.

1.　はじめに

インド，北東部のアルナーチャル・プラデーシュ州[1)]の最西端に位置するタワン県(Tawang District)

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程（文化人類学）



地図1　アルナーチャル・プラデーシュ州と周辺地域

と西カメン県(West Kameng District)の主要な民族集団であるモンパ(Monpa)の女性が着用する貫頭衣のシンカと上着のトゥドゥンは，モンパだけではなく東ブータンのメラ(Merak)およびサクテン(Sakten)に住む牧畜民ブロクパ(Brokpa)の民族衣装として知られている。

本稿では，モンパ女性の民族衣装に焦点を当て，ブロクパなどと比較しつつその衣服の実態を検討し，誰によってつくられ，いつごろからどのように着られてきたのか，そしてモンパや隣接する少数派集団間のローカルポリティックスをどう表象しているのかを考察する。

モンパとブロクパが周囲とは明らかに異なる同様の特徴的な衣服や帽子を着用していることから「ブロクパはモンパないしモンパの一支族だと考えられる」[2]といった推測がなされてきた。確かに衣服やその着衣法には民族集団，地域，職業，階層などの属性を示し，ほかとの差異化を図る記号としての機能があるが，その地域の文化や伝統，何らかのシンボリズムが反映されている場合もある。逆に歴史的な時間の中でさまざまな要因によって衣服が変化し，着る人の属性の違いを隠してしまうケースもあり，一義的な決定はできない[3]。モンパとブロクパの民族的関係については，ブータン側からの調査も続けているが，まだ結論を出す段階にはない。この点については，いずれ稿を改めて書くつもりである。

モンパの衣服に注目した先行研究としては，それらは国の境界による地域区分ごとに研究されてきたが，インド領内でみられる衣服については，エルウィン[4](Verrier Elwin)やゴーシュ[5](G.K Ghosh & Shukla Ghosh)が，模様や素材について部分的に触れている以外には本格的な研究はない。ブータンでは，アリス(Michael Aris)，ポマレ(FrancoisePommaret)，マイヤーズ(Diana K. Myers)らがブータン北東部の人々とモンパの織物や衣服の類似性・共通性に注目してきた[6]。特にポマレは，織物技術やデザイン，衣服を糸口の一つとして，言語や共有する歴史を検討しながら東ブータンとタワン，西カメン，アッサム，チベットとのつながりを整理し，インド，中国，ブータンという三国の国境で分断される以前のこの地域に関する先駆的な研究成果を示している[7]。

ポマレは，「衣服は交易や強い文化によって変化するため(研究の)糸口としては大変もろいが」と述

べているが［Pommaret 2002: 184］，モンパの衣服に関しては，現地の状況や地域的な違いについて具体例が示されず固定的な記述になっている[8]。モンパの場合には，「強い文化」とは過去にはチベット，現在はインドの文化で，モンパの周辺には，隣接するほかの小さい民族集団があり，それに対しては，優勢な文化と最大の人口を持った存在である。モンパはチベット人と隣接する少数の民族集団との間にあり，三層の民族集団の中間に位置し，さらに国民国家であるブータン，インド，中国に分断されているという複雑な状況下にある。

現在，インド政府は，モンパを指定トライブ[9]に分類しているが，集団間の言語や生活環境の違いに加え，伝統的なチベットやブータン，アッサム，そして新たに組み込まれたインド国家という関係性によって実際にはその内部は分化し[10]，複雑な周囲との関係が民族衣装の異同にも反映している。

民族衣装は，しばしば「伝統的な」「地方の」「独特の」，そして「美しい」という形容詞を冠して語られてきた。それらの言説は，世界各地の「博物館」展示にみられる衣装による民族集団についての解説や，民族を表象する祭りや儀礼の衣装として観光宣伝の中で紹介されるときに顕著に表れている。しかし，近年の研究によって，集団的に着用される民族衣装が国家や周辺の民族集団との関係性の中で変化してきたこと，そして着用する人々によって戦略的に取捨選択されていることなどが世界各地の事例によって考察されてきた［Barnes & Eicher 1992; ワイナー＆シュナイダー 1995; ボガトゥイリョフ 2005; Eicher 1995; 金谷 2007; 小泉 1996; 杉本 2002; 鈴木＆山本 1999; Tarlo 1996］[11]。本稿ではこれらの先行研究を踏まえたうえで，現地のフィールドワークの成果にもとづいて考察する。

2. 調査地の概要

2-1. 地理

西カメン県とタワン県はアルナーチャル・プラデーシュの最西端に位置している。南のアッサム州を流れるブラフマプトラ川一帯の平原とタワンの標高差は約3,000メートルある。州境のチェックポストのあるバルクポン(Balukpon)の標高[12]は210メートル，カメン川を眼下に眺めながら山道を登りつめたところが西カメンの県庁所在地，ボムディラ(Bomdila)（2,530メートル）である。その少し北のディラン(Dirang)(1,928メートル)でいったん高度が下がるが再び登り道になり，タワンとの県境4,175メートルのセ・ラ（峠）に至る。タワンの県庁所在地タワンの標高は3,300メートルで，中国国境のマクマホン・ライン[13]近くのブムラ(Bumla)までは37キロの距離である。アッサムの中心地ガウハーティ(Gauhati)からタワンへは陸路で1日半から2日かかる。

アッサムとタワンを結ぶ幹線道路は，中印国境紛争の後に軍事用に整備されたが，その道路沿いの町の商店では，他州からの食料品，日用雑貨が大量に売られている。しかし，この道路も夏のモンスーンの時期にはがけ崩れ，冬は積雪によって寸断され地域が孤立することもしばしばである。モンパの主たる生業は農業で，少数が山岳地帯で季節移動による牧畜を行っている。村落へ通じる多くの道路は未舗装のままで，電気や水道がない村も多く，またあっても保守が行き届かないために停電や水道管の故障が恒常化している村が多い。こうしたインフラ整備の遅れが州全体の後進性の原因の一つとなっている。

2-2. 歴史

この地域は，かつてはチベット語でモン (Mon /Mong) の国(Yul)を意味するモンユルと呼ばれてき

た。中央チベットからみて南部の辺境地帯を指す言葉であるモン，そしてその住民の総称「モンパ」にはチベット人からみて「ヒマラヤの南部あるいは西部の山岳地帯に住む非インド人，非チベット人の蛮族」というニュアンスが込められていた［Aris 1980: xvi］。

7世紀前半にソンツェン・ガンポ王によって建国された吐蕃王国の時代には，モンユル（中国語では門隅）はすでに王国の管轄下にあった［Zhang 1997: 13］。16世紀には東ブータンのメラやサクテン，そしてタワン地域にまで勢力を伸ばしていたチベットのゲルク派政権は，17世紀中頃のダライ・ラマ5世(1617–1682)の治世にタワン僧院を基地に現在の西カメン一帯の支配を強めていった。タワン僧院はゲルク派政権にとっては宗教的な事務管理だけでなく，モンユル一帯の行政の中心でもあった。西カメンに現在も廃墟が残るディラン・ゾン(Dirang Dzong)，タルン・ゾン（Talung DzongまたはTaklung Dzong) は，タワン僧院の行政支配のもとで争議の調停や徴税の任を担っていた［Sarkar 1981: 4–15］。当時のチベットはこの地域からコメ，薬草，竹細工，野生動物の皮，紙などを輸入していた［Pommaret 2002: 180］。

ダライ・ラマ5世の没後，その転生に選ばれた少年，のちのダライ・ラマ6世[14] (1683–1706) は，中央ブータン出身の著名な埋蔵法典の発掘僧ペマ・リンパ(1450–1521)の末弟ウゲン・ザンポの子孫で，タワンのオゲンリン(現在の現地名はウルゲリン)で生まれた［Aris 1989: 23, 111–114］。現在のブータン王家もペマ・リンパにつながる家系から出ているが［Aris 1989: 106］，第4代国王の王妃方の祖先もタワンやドムカル・メロン（西カメン，カラクタン）にゆかりがある［Ashi Dorji Wangmo Wangchuck 1999: 11–16］。

1914年のシムラー会議でタワンの北に中印国境が引かれたが，実際にチベットの支配に終止符が打たれたのは1938年にイギリスがタワンから役人を撤去させたときとされる［Osik 1999: 102–108］。しかし，チベットとの往来は，1962年から63年の中印国境紛争により完全に国境が閉ざされるまで続いていた。

一方，ブータンとの東の国境は，古くからある交易路を使って，現在でも地域の人々のみ往来を続けている。正式には各地の役所で許可書を申請しなければならないが，寺院祭礼などの折にはこれらの許可書なしで相互に通行できる。

以上のように，モンユルの住民として共有してきた歴史的背景が，モンパとブータンの間の言語，衣，食，住などの文化的近接性を高めてきたが，現在，衣服は日常生活のうえでは西洋化やインド化の方向に向かい，食生活や住宅も次第にインド平原部のものへと変化しつつある。州内の学校ではヒンディー語と英語による教育が行われ，他州への就学，就職の機会も増え，大きな町ではテレビが普及するなど，モンパ社会はほぼ完全にインド国家の一員として組み込まれ大きく変貌しつつある。

インナーライン（内郭線，内部国境線）は，イギリスがアッサムでの茶園経営に乗り出したころ，当時「野蛮な種族」とされていた周辺の山岳民を統治することの困難さからアッサムの平地民と山岳民を隔てるために1873年に引いたもので，許可証を持たないものがこの内部国境線を越えることを禁じた［ゲイト 1945: 408–409］[15]。現在は指定トライブの保護の名のもとにインナーラインが保持されているが，イギリスの隔離・隔絶政策がインド北東部の少数民族地域の孤立性を助長し，独立後のインド国民国家形成の障害になったとする指摘[16]がある。しかし，山間部の限られた土地[17]を耕して生計を立てている農民やヤクやヒツジの放牧地を求めて遠くまで移動する牧畜民の生活圏を確保するためには，現時点では他州からの人口流入はある程度制限される必要があると考える。現実的には，西カメンやタワン

でもビハールやパンジャーブなどからやってきた人々が地元のトライブの名義を借りて商店を経営しているケースが多く，その数はトライブの直接経営よりもはるかに多い[18]。

地図2　タワン県，西カメン県周辺図

2-3.　民族

西カメン県にはモンパのほかにシェルドゥクペン(Sherdukpen)，チベッタン(Tibetan)，アカ(Hrusso)（＝アカ Aka）[19]，コワ(Khowa)またはブグン(Bugun)[20]，ミジ(Miji)などが，ある場所では隣接し，ある場所では雑居の状態で居住している。タワン県にはモンパのほかにチベッタンが住んでいるがその数は不明である[21]。すべてチベット・ビルマ語系の諸語を話す人々である。

1991年現在の各トライブの人口はモンパ(38,862人)，シェルドゥクペン（2,547人），アカ（3,531人），ブグン（1,046人），ミジ（5,779人）［Rao 2003: 37］で，モンパが人口のうえでは，圧倒的に優勢な勢力である。しかし，「モンユルの住民」の総称であったモンパがこの地域の人々の名称になり，やがて指定トライブの民族名に限定されることになった経緯はわかっていない。

現況では，モンパはセ・ラの北のタワン・モンパ，南の西カメンのディラン・モンパ，カラクタン・モンパの3グループに大別される。タワン・モンパはブラーミ(Brahmi)語が言語で自称もタワンパ，あるいはブラーミ・モンパである。ディランとカラクタンのモンパの言語はツァンラ(Tsangla)語で，ブータンの中央部や東部から移住してきたともいわれているが，確証はない。タワンではゼミタンに住むパンチェン・モンパ，ティンブー地方のマゴウ・モンパなども指定トライブとされているが，言語[22]はそれぞれ異なる。西カメンにもリシュ(Lish)，チュグ(Chug)，ブトゥ(But)，ルブラン(Lubrang)などのモンパが指定トライブになっているが，それぞれ異なった言語を持つ少数集団である[23]。自称は，多くは各自の居住地域や村名に「パ」をつけたものとなっているが，ルブランのモンパは，牧畜民を意味する「ブロクパ」と自称している。彼らの多くはブータンのサクテンからの移住者である。

中国政府はチベット南部の錯那（ツォナ）と墨脱（メト）の門巴族もモンパと同じ民族として扱っているが，門巴族の居住地への外国人の立ち入りは厳しく禁じられていて調査ができないことと，紙数の制限もあるため，本稿ではこの問題については触れず，内容に関係する部分のみの記述にとどめる。

3.　表象としての衣服

3-1.　観光・博物館展示・写真集の中の衣服

アルナーチャル・プラデーシュが一部地域に限ってではあるが，外国人観光客を正式に受け入れたのは，1992年のことで，その後，1998年にタワンへの訪問が可能になった。1993年に発行された雑誌*Discover India*[24]のアルナーチャル・プラデーシュ特集号の表紙には，顔面に入れ墨と黒い鼻栓をし，民族衣装を身につけ，竹や籐製の籠を持って並ぶ4人のアパ・タニ(Apa Tani)女性の写真が使われてい

る。ほかにもニシ(Nishi/Nishing)，ヒル・ミリ(Hill Miri)，アカ，アディ(Adi)などの諸トライブの男女が民族衣装を着た写真が多く掲載されている。

州政府が「トライブ」あるいは，「トライバル・ツアー」を前面に打ち出して観光客の誘致[25]に力を入れていることは，パンフレットやインターネット[26]による州の観光紹介をみれば一目瞭然である。ボムディラのモンパが経営しているH旅行社のパンフレットには，自然の素晴らしさと並んで「バラエティあふれる習慣，文化，言語，衣装を豊富にもつ人びと」という文章がある。タワンのモンパが経営するT旅行会社のパンフレットには，「トライバル・ツァー」や「文化ツアー」のモデルコースの中に，各地のトライブの村をめぐり，トライブの踊り(Tribal Dance)を鑑賞するプログラムが盛り込まれ，民族衣装で着飾った民族集団の写真が使われている。このように，民族衣装とそれを着用する人々は，観光資源として消費されているのである。

衣服が民族を表象するもう一つの例は，「博物館展示」である。筆者が1995年と2004年に訪れたイタナガルのジャワーハルラール・ネルー州立博物館には，27のトライブが民族衣装を着た人形と高床式住居や石造りの住居などの模型によって紹介されるコーナーがあった。一つの民族集団に一組の男女の人形がセットされているが，そこには集団間の複雑な分化状況や集団間の曖昧な境界は表されていない。

また，インドのトライブをテーマとした写真集にもアルナーチャル・プラデーシュの民族集団は，しばしば取り上げられている[27]。衣服はもちろん，入れ墨，帽子，髪型，装飾品などが各集団を表象する記号として意識されている。中には，いつどこで撮影されたのか不明な写真もあるが，民族名が明記されることによって，固定化されたイメージがつくりだされている。

このように，「博物館展示」や「写真集」などによって固定されて流通し，「観光資源」として消費される民族衣装であるが，実際には国家や隣接する民族集団との関係性の中で変化し，着用する人々によって取捨選択されている。次項以降では，そのことを，モンパ女性の衣服を通して考察する。

3-2.　モンパ女性の民族衣装

モンパ女性の衣服の基本は，シンカ(*shingkha*)と呼ばれる袖のないワンピース・ドレス，つまり貫頭衣で，臙脂色に白，あるいは薄い灰色や青色の縦縞が織り込まれている。長さは膝下まで，ふくらはぎまで，くるぶしまでと着る人によって異なる。まったく染色していない白地のシンカを着る人も多いが，現在，寺院の法要などの正装として着られるのは臙脂色のものである。

一般的なシンカは幅80~90センチ，長さ2~3メートルの一枚布，またはその半分の幅の二枚の布を縦に縫い合わせて一枚にしたものを二つ折りにし，布の中央の輪にあたる部分に頭がゆったりと入るほどの穴をあけ，両脇は両腕の部分だけをたっぷりと空けて裾まで縫い閉じる。形状は，ごく単純な貫頭衣であるが，中南米のポンチョのような上から羽織る衣服ではない。全体を前方に寄せてギャザーをつけ，後ろのエプロンのような腰当て布を押さえるように帯を締める。

シンカに使われる臙脂色の布は，モンパがエリ(*eri*)と呼ぶ手紡ぎの絹糸をカイガラムシの分泌物ラック(*lac*)[28]で染めたものを，地機や高機などの織り具で織った平織り布である。エリ・シルク[29]はブータンではブラ(*bra*)，アッサムではエンディ(*endi*)あるいはエリ・シルク，日本では一般的に野蚕と呼ばれているものである。ゴーシュによれば，エリ・シルクはアッサムでは「貧乏人のシルク」と呼ばれ，工場製の布ができる前は，冬の衣類やベッドカバーに使われたという［Ghosh & Ghosh 2000: 10］。確か

写真1　エリ・シルクのシンカ，トゥドゥンとヤクの毛の帽子ジャムで正装したモンパ（タワン）。

写真2　シンカと腰当て布（リシュ村，西カメン）。

にエリ・シルクは見かけよりも暖かく，防寒の役目を果たしている。近年木綿や化学繊維に化学染料で染めた安価なものも出きているが，モンパ女性が民族衣装として着用しているのはエリ・シルクで織られ，ラックで染められた臙脂色のシンカである[30]。この二つの要素の組み合わせが，モンパの民族衣装の特色といえる。しかし，この材料は，モンパの居住地で生産されるものではない。このことについては次節で述べる。

寒いとき，正装する場合はシンカの上に羽織と同じような形状の上着トゥドゥン(*tudung*)を着る。トゥドゥンはラックで染めたものが大半だが，白無地もある。糸はエリ・シルクである。花，星，ウマなどの動物，その上に乗る人物，矢絣，まんじ(*swastika*)などをモチーフにした幾何学模様がカラフルな糸で織り込まれている。このトゥドゥンは，シェルドゥクペン，アカ，ミジが着ることもあるが，シルクへのこだわりはモンパほど強いものではなく，木綿や化学繊維が多い。

ヤクの毛をフェルト状にした帽子ジャム(*jamu*)もモンパを特徴づける。ベレー帽のような形状でつばはないが，代わりに5本の房がついていて，雨が降ったときにはその房を伝って水が落ちる雨樋の役目をするといわれている。雨の日だけでなく晴れていてもかぶるものだが，牧畜民のような山間部の住民がかぶるもので，町であれば高齢者が使用する。西カメンでは錦織の布を使った円筒形の布製帽子ゴチェン・ジャム(*gochen jamu*)が正装するときにかぶられる。

リシュ，チュグ，ブトゥ，そしてルブランのモンパは，言語は周囲のモンパとは異なっているが，衣服はほかのモンパとまったく同じである。しかし，モンパとされる人々のすべてが，シンカやトゥドゥ

写真３　左の子どもの帽子がゴチェン・ジャム（ルパ，西カメン）。

写真４　男性の帽子がドウジュマプジャ。女性はレウを着てシェルジャをかぶっている（ゼミタン，タワン）。

ン，そしてジャムを民族衣装としているわけではない。

たとえば，チベットとの国境に近いタワン東部のティンブー・サークル(Thingbu Circle)のマゴウ(Mago)のモンパの衣服はほかにないユニークなものである。マゴウは，タワンから徒歩で東へ3日を要する標高4,000メートルの山奥にある。指定トライブとしては「モンパ」であるが，チベット人であるとの記述もある[31]。民族衣装もモンパとはまったく異なることから，多くのモンパがマゴウの人々をモンパの仲間としてではなく，チベット人に近い牧畜民とみなしている。

黒と赤二色の厚手のウール布を互い違いにはぎ合わせてつくったマゴウ女性のワンピース型の衣服リゴー(*rigo*)のスカート部分を広げると4メートル以上もある。前開きになっていて和服のように右前にして合わせ，帯をする。ヤクの毛をフェルト状にした帽子は，バケツのように深く，25本前後の細い房が垂れ下がっている。モンパの衣服とはまったく異なるものである。しかし，この衣服も新たにつくる人は減り，ほかのモンパと同じシンカを着る人が増えている。

パンチェン・モンパ(自称パンチェンパ)と称される人々が住むタワン県のゼミタン[32]の2005年8月現在の人口は，280人である[33]。住民の一部は1962年の中印国境紛争の際にチベット側から逃れてきた人々である。もともと，狩猟生活を送っていたが，チベットからやってきた高僧がきて仏教を広めた後，狩猟をやめたという。パンチェン・モンパについては，中国側の文献が，錯那県の「邦金(Bangjin)」に住む門隅・門巴族としてその衣服について記述している［Yu 1995: 438］。言語は，タワンとはやや異なる。張も「タワンとは別に錯那県勒布区ルプ（勒布）にはルプ門巴語がある」［Zhang 1997: 4］と

している。パンチェン・モンパの衣服も，一般のモンパのものとは異なっている。

パンチェン・モンパの衣装は貫頭衣ではあるが，長さは膝丈ほどで，自宅で織ったという厚手の40センチ幅のウール地を縦に縫い合わせ，輪の頭を入れる部分だけ縫わずに残す。脇にはチベット人が今でも使っている色鮮やかな布を貫頭衣の脇を縫い合わせるときにマチとして入れている。この衣服の名称はシンカではなくレウ(*rheu*)という。幅が小さく厚手のウール布でかさばるため，シンカのようにひだをつくることはできないが，両脇の柄をみせるように両脇の布を身体の前方向に折り，その上から帯を締める。もともとゼミタンの女性たちは四季を通じてこのレウを着ていたが，中印国境紛争以後，国境警備のために道路が整備されたお陰でゼミタンの人々もタワン僧院の祭りなどに出かけるチャンスが増えた。タワンの女性が臙脂色のシンカを着ているのをみて，パンチェンの女性たちもシンカを着るようになったとのことである。現在レウを着る人はごく少数である。

パンチェン・モンパの特徴は，二種類ある帽子である。最も一般的なのは，シェルジャ(*sherja*)あるいはシャルジャで，浅い円筒形をしており，外側に折り返されたフチにはオレンジ色の起毛ウールが使われている。もう一つはヤクの毛を浅い円筒形に固め，孔雀の羽根を横に飾ったドウジュマプジャ(*dujumapja*)である。チベット側の勒布区の門巴族も同じものをかぶっている［Yu 1995］。

以上のように，モンパ女性の一般的な民族衣装であるシンカ，トゥドゥン，ジャムは，すべてのモンパが民族衣装としてきたわけではない。トゥドゥンはほかの民族集団にも共有されていた。そしてその材料は，地元で得られるものではない。逆に，地元で得られる羊毛糸を材料として，自らの独自の衣服を着てきたマゴウやゼミタンの人々が，次第に主流のモンパの衣服に変更しつつあることは，モンパ自身の衣服も同様に変化してきたことを示唆していると考える。

3-3.　布はどこからきたか

前節で触れたように，身近に入手できる羊毛糸と違って，シンカとトゥドゥンの材料であるエリ・シルクもラックもモンパの居住地域では生産されていない。エリ・シルクはアッサム，ラックはアッサムやメガラヤ，東ブータンのモンガル県がその生産地である。ブータンでは，以前はアッサムとの国境に近い低地で養蚕が行われていたようだが，殺生をきらうブータンの人々の間では，養蚕は盛んにはならず，政府が計画した養蚕農場も閉鎖してしまったという[34]。無理にブータンで養蚕を行わなくとも，アッサムとの国境のメラ・バザール[35]で紡いだ糸を入手することができる。

それらの材料をモンパがどこから得ているのかを調べていく過程で，シンカやトゥドゥンの布が，ごく少数の例外を除いてモンパ自身によって織られてきたわけではないという事実がわかってきた。これが第一の発見である。衣服の素材を外部に求めるという点に，モンパの独自性を考える手がかりがあるかもしれない。

モンパの家の入口のベランダには決まったように機織り具[36]が設置されており，農作業や牧畜業の合間に女性が布を織っている姿が目にとまる。しかし，その多くは身近な場所から入手できる羊毛を使った毛織物や幾何学模様のカラフルな袋（通称モンパバッグ）用の布であって，シンカやトゥドゥンを織る人はごく一部である。ディランで昔からシンカやトゥドゥンを織っていたという60代の女性二人も自分たちが例外であることを認めている。

ディランには2005年当時3軒の織物工房があったが，これは2002年に政府が主催した女性による地域の手工芸品製作を促進する織物研修プロジェクトによるもので，約40~50人のモンパ女性が研修に参

写真５　モンパバッグを織るモンパ（ディラン，西カメン）。

写真６　モンパやブログパに売るためのトゥドゥンを織っているシャルチョッパ女性（ラディ村・ブータン）。

加して，最後まで残った人々のうち3人がそれぞれ開いた工房である。そのうち1軒は閉鎖され，2009年3月現在は2軒となっている。この2軒もマニプル州やアッサム州から住み込みで働きにきている女性たちがその主たる製作者である。モンパは，自らの民族衣装を自分たちではつくらない人々なのである。

これまでの先行研究[37]でも，モンパのトゥドゥンはモンパも製作するが，主に東ブータンで織られ，モンパの地へ運ばれたとされてきた［Myers & Pommaret 1994: 49］。実際に，東ブータンのタシガン県のラディで(Radi村)ではシンカやトゥドゥンを織り，それをモンパやメラやサクテンのブロクパに売っているシャルチョッパ[38](Sharchopa)たちがいる。彼らは，インド国境近くのアッサムのバザールから糸とラックを購入し，自分たちで染めと織りの両方を行っている。2008年の調査で，ラディの40歳代の男性二人に聞いた話では，祖父の代からタワンへ行商に行っているが，祖父によれば当時のタワンではまだ多くの人々がウール製の貫頭衣を着ていたという。彼らは，モンパやブロクパの現在のシンカやトゥドゥンはこの村で最初に製作されたというが，この点を明らかにするには，さらに多くの人々の証言と裏づけが必要であろう。

メラのブロクパは，山から下りて乳製品をコメや野菜と交換する場合にラディ村に滞在する。そのときに泊る家は先祖代々決まっており，そのような機会にラック染めや機織りを覚えるという。機織りはサクテンよりメラのほうが盛んであるが，ほとんどは自家用である。女性の衣服は一般的なモンパとまったく同じであるが，標高3,500メートルの高地の村ではラックもエリ・シルクも生産できない。こ

写真7　メラのブロクパの帽子は房が細く，デザインもモンパとはやや異なっている。

写真8　トゥドゥンを織るラブハ女性（アッサムのタンラ）。

れらの材料は，乳製品を売って得た現金でラディやメラ・バザールで購入したものである。

筆者が調査したインド，ブータンのモンパやブロクパの居住地の中では，メラが最も民族衣装の伝統が保持されている場所であるといえる。村の女性たちは現在でもほぼ全員が日常着としてシンカを着ている。外国人の立ち入りが制限され，地理的にもほかと隔絶した地域であることもその理由であろうが，牧畜という生業と高地での暮らしにあった衣服として大事にしていることがうかがえる。ヤクの帽子も自分たちでつくっているが，その強みからか，モンパのものよりもファッション性が加わり，ウールの上着にも刺繍が施されている。これはアルナーチャル・プラデーシュのモンパにはないものである[39]。

ここにはタワン僧院の創建者でもあるダライ・ラマ5世の弟子ロデ・ギャムツォ(Lodre Gyamtso)が1650年に建立したゲンゴー寺院が現在も残されている。地元の人々の話では，ロデ・ギャムツォは，ダライ・ラマ5世の命でここにゲルク派の拠点となる僧院を建設する計画を立て，その場所まで選定してあったが[40]，ブータンを統一しつつあったドゥック派勢力[41]の追撃によって断念せざるを得ず，最終的にタワンに僧院を建てたという[42]。ロデ・ギャムツォがモンパやブロクパの間でメラ・ラマの愛称で親しまれているのはこのメラにちなんでのことである。メラにある寺院は現在でもすべてゲルク派のものであるのは，このような理由からである。

一方，アッサムでは，ウダルグリ(Udalguri)やタンラ(Tangla)周辺がシンカやトゥドゥンの生産地である。その製作にかかわっているのはアッサムのラブハ(Rabha)やボロ・カチャリ(Boro Kachali)[43]の女

性たちで，商人から材料を渡されて請負仕事で布を織っている。その布はバザールで売られるほか，アッサム商人やモンパ商人によって西カメンやタワンに運ばれている。ウダルグリはイギリス植民地時代からチベット人，ブータン人，モンパ，アッサム平原や北の丘陵地帯の山岳民族の間の交易でにぎわう有名なバザールである。モンパにとっても生活用品や糸，衣類などを購入するための重要拠点であったが，反政府組織のテロ活動などが頻発した90年代から治安が悪化し，2005年の調査時も町が急激に寂れているのがみてとれた。

筆者の調査での第二の発見は，モンパのラックで染められた現在の色のシンカやトゥドゥンは地域によって時期は異なるが，遅くとも1930年ごろにブータンからもたらされたもので，その前は身近な材料である羊毛糸で自ら織ったウール製のシンカや白い木綿やエリ・シルクの衣服を着ていたという事実である[44]。皆が臙脂色の衣服を好むようになると，ウダルグリからも同様のシンカが運ばれてくるようになったという。メラのブロクパの中にも，1940年代ごろは臙脂色のシンカよりも白いシンカを着ている人が多かったと記憶している人々がいる。

筆者が確認できた最も古いシンカの写真は，1933年の*Man*誌に掲載されたクーパー(R.E Cooper)の論文上である［Cooper 1933: 125–128］。東ブータンのタシガンで撮影され，牧畜民のDaktaだと書かれているが，これはダクパ(Dakpa)の間違いであろう。東ブータンのインド国境付近に現在でもダクパと呼ばれる集団はいるが，タワンのモンパのブータン人による他称もダクパである。当時のタワンの人々がダクパと呼ばれ，これらの牧畜民の服装をしていたとも考えられる。モノクロ写真で，現在のシンカと同じように縦縞がある貫頭衣であることが確認できるが，素材についての言及はなく，エリ・シルクであるかどうかはわからない。しかし，1960年代の東ブータンのダクパが現在のモンパやブロクパとほぼ同じ素材と形状の衣服を着ていたことは西岡の記録[45]からわかる。

以上の言説や資料が示すように，モンパのシンカやトゥドゥン用の布は，主に東ブータンやアッサムで生産されてきたが，それらがアルナーチャル・プラデーシュのモンパの地にもたらされる前には，ウール製やラックで染めていない白地のものを着ていたことがわかっている。誰がこの布を考案し，なぜこの布が広くモンパの人々の間に広がり，民族衣装になったのかということについては，ブロクパとモンパの民族的関係を精査する必要があるだけではなく，長い間のこの地域全体の相互の交流やイギリス植民地政府との時間を追った関係などをさらに詳しく調べる必要があるだろう。

次節では，中国に対する国境をめぐる懸念から，1914年前後から1930年代にかけてイギリス植民地政府がタワンへの調査隊[46]を送るようになり，モンパも西洋人の目に触れるようになっていったという歴史事実と取り上げ，この地域全体に広がる貫頭衣という衣服を通してモンパの衣服の変化を考察する。

3-4.　貫頭衣という共通衣服

貫頭衣というスタイルは，モンパと隣接して暮すシェルドゥクペンやブグン，ミジ，アカなどにも共通したものとなっており，モンユルという地域は，貫頭衣文化圏を形成する。それぞれの民族集団の衣服については，モンパと同じくさらに細かな調査が必要であるが，現在までに現地調査や，文献から以下のような情報が得られている。

シェルドゥクペンの女性の民族衣装は，シンカではなくシンク(shinku)と呼ばれるが，型式は貫頭衣で幅はシンカの倍ほどあり，正面のギャザーもたっぷりとしている。しかし，色は白で襟の開き方がV

写真9　シェルドゥクペンの貫頭衣シンク

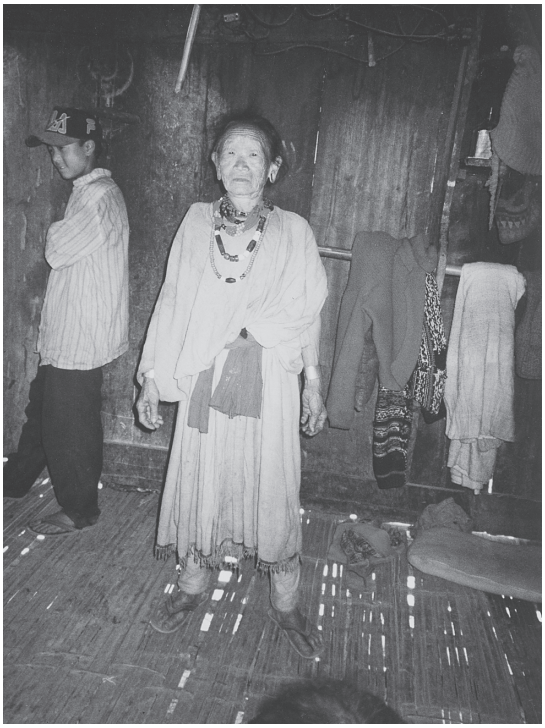


写真10　ブグンの貫頭衣シンカオ（パルジャ村，西カメン）。

字型で特に背中が大きく開いている。素材は，エリ・シルクもあるが，最近は木綿や化学繊維が多い。帯はモンパと同じであるが腰当て布はしない。シャルマによれば，シェルドゥクペンの先祖は，チベットの王とアッサムの王女の間に生まれた王子とされ，彼がチベットから現在の西カメンにやってきたときには，先住のアカやブグンとの争いが絶えず，和平の誓いのしるしとして，アカやミジの王に塩，布，家畜その他を貢物として贈っていたほか，タワンのモンパの王に対しては，3年ごとにエリ・シルクの布，コメ，籾つきのコメを贈っていたという。貢納品として，エリ・シルクは外部からもたらされていたのである。その返礼として，タワンからは上着，靴，毛布，首飾りなどが贈られていた［Sharma 1988 (1960): 5–7］。

2004年，2009年にルパ(Rupa)の仏教寺院の法要に参加する機会があったが，普段は民族衣装を着ることが少なくなった女性たちもこの日は正装で集まっていた。しかし，木綿のシンクを着る人がほとんどであった。

ブグン（コワ）の女性も白い貫頭衣シンカオ(*shingkhao*)を着てモンパのトゥドゥンと同じ上着を着る。人口1,113人（1994年[47]）の少数派であるが，この衣服を着ている女性はほとんどいなくなっている。筆者も1999年に一人の老婆がこの貫頭衣を着ているのをみたのが最後で，このときは古いエリ・シルクであった。パンディ(B. B. Pandey)によれば，ブグンは機織をせず，工場生産の白布やエリ・シルクの白布からビミ・シンカウ(*bimi-singkhau*)というドレスをつくるという［Pandey 1996: 42–43］。カラー写真では白い貫頭衣にモンパと同じ臙脂色の帯と上着を着ている様子がわかる。ブグンは，イギ

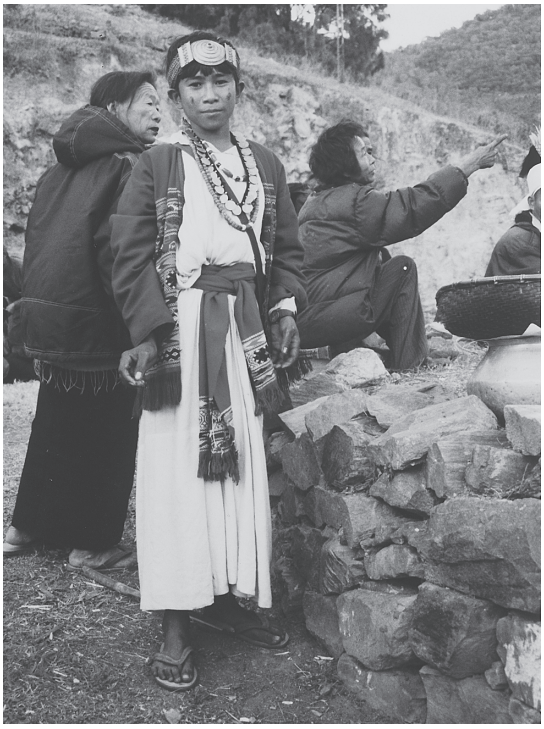


写真11　女装をしたミジの少年
（ナフーラ・サークル，西カメン）。

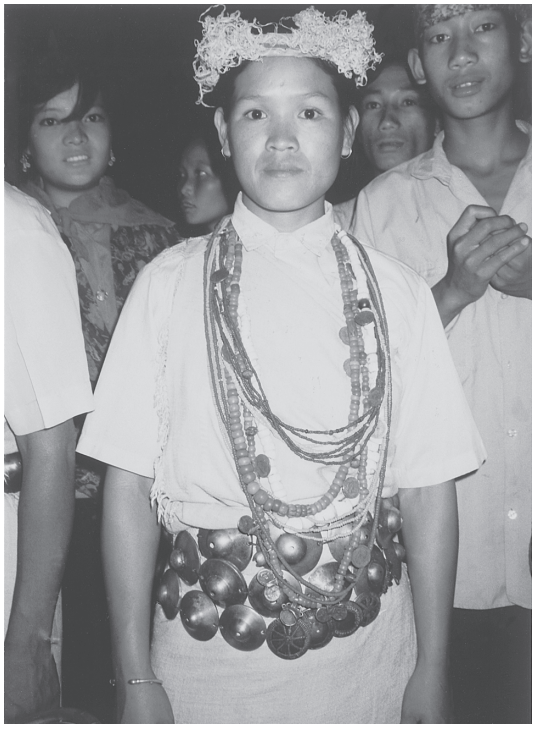


写真12　ニシの一枚布のドレス（東カメン）。

リス植民地時代はアカの奴隷として知られていた［Pandey 1996: 4］。

ミジも同様のギブルン(*giblung*)という貫頭衣のドレスを着る。色は白，素材はエリ・シルクや木綿である。モンパのトゥドゥンとよく似た模様入りの上着を着ているがこの名称はサショリ・パンロウという。ラックではなく，化学染料で染め，布も木綿か薄手のアクリルのような化学繊維である。2004年11月にナフラ・サークル(Nafra Circle)でミジのチン・ダン(Ching Dang)という儀礼に参加した。野外で行われる悪霊祓いの儀式で，女性たちはまったく民族衣装を着ていなかったが，司祭の手伝いの少年が女装をしていた。白い貫頭衣の上にサショリ・パンロウを着て，頭には金属製のヘアバンドという服装である。全体として，写真のアカの衣服と大変似ている。女性の民族衣装は，2005年のインド独立記念日の式典で，ミジの20代のダンサーが着ていた。現在，ミジが日常着としてこのドレスを着ることはほとんどなく，エリ・シルクへのこだわりもまったくないとのことであった。

アカの女性もモンパ女性と同じ白い貫頭衣を着ていたというが，現在もそれを着る人はほとんどいなくなっている。筆者自身もアカの衣装は写真でしかみたことはない。シンカとよく似た膝丈の白い貫頭衣(*pol*)の下に筒型の脚絆をはいた写真である。上着にはモンパと同じ(おそらく)臙脂色のトゥドゥンを着ている写真もある［Sinha 1988 (1962)］。アカは織物技術を持たずアッサム平原からそれを買っていたという。エルウィンは，アカは衣服，毛布，刀をブータンから買っていたと記している［Elwin 1968 (1958): 482］。しかし，エルウィンは別の文献で，1913年[48]にアカとの友好関係を築くためのアカ・プロムナード(Aka Promenade)に同行したケネディ (R. S. Kennedy)[49]が，「当時のアカの女性が男性と

同じように一枚布を身体に巻きつけていたが，その布はアッサムのシルクであった」としていることを記述している［Elwin 1959a: 81］。

当時は，セ・ラの北のタワン地方はチベットの行政下で栄えていたが，南のディラン地方のモンパは，ミジ，アカ，バンギ[50] (Bangni)などの非モンパによる略奪と寺院からの過度の要求に苦しみタワンほど豊かにみえなかったという［Osik 1999: 101–102］。ナイールもモンパがアカにコメや木綿の布などで年貢を払っていたことを記述しているが［Nair 1985: 71］，ナフラ・サークルに住むミジやアカに対して今でもナフラ・ギドゥ(ギドゥはディランのモンパ語で「野蛮人」を意味する)とディランのモンパが陰口をいう背景にはこうした歴史が隠れている。

モンパに隣接して住むニシもバンギも，ハイメンドルフがかつて略奪や誘拐を繰り返してきた非仏教徒のトライブとして記述している民族集団であるが[51]，その衣服は，貫頭衣ではなく男女ともに一枚布を身体に巻きつけて肩で交差させてピンで留めるシンプルなものである。

さらに，西シアンのメチュカのメンバ[52]は一般のチベット族の女性が着るチュバと貫頭衣グシーの二種類を民族衣装にしている。グシーはチベットのコンボ地方でもみられる脇を縫っていない貫頭衣で，素材はウール地，色は黒かこげ茶などである。チベット側の墨脱地区からやってきたという複数のメンバの証言もあるので，チベット，そしてコンボの二つの伝統を保っている可能性はある。

一方，ブータンでは北東部クルテ地方の女性は，現在のブータン全体の民族衣装となっている一枚布を身体に巻きつけるキラ(*kira*)ではなく，シンカ，あるいはクシュンとよばれる貫頭衣を着ていた時代があった。19世紀から20世紀にかけてのことである。素材は古いものはイラクサ科の植物で，その後は，木綿や羊毛で織られ，アップリケやカラフルな模様が織り込まれたものも多い。日常着からやがて宗教儀礼用の衣服となったが，マイヤーズは，クルテ地方で古い時代に織られていたシンカが，墨脱の門巴族の地域の貫頭衣と大変似ていることを指摘し，ブータンの古い時代の貫頭衣が，仏教以前の宗教儀礼に結びついていたのではないかという考察をしている[53]［Myers 1994a: 106–116］。アダムス(Barbara S. Adams)も，19世紀あるいはそれ以前の製作と伝えられるブータンの貫頭衣に仏教のマンジ(万字，卍)とは逆向きのボン教由来のマンジが織りこまれていることを写真とともに紹介している［Adams 1984: 92–93］。これらボン教に結びつく貫頭衣がモンパのシンカと関係があるのかどうかは，まだわかっていないが，基層文化としての貫頭衣が仏教以前の地元のボン教と結びついていたとしたら興味深い。

このように，マゴウを除くモンパの周辺の民族集団の女性の衣服には貫頭衣という共通項がみられる。特に注目したいのは，西カメンのモンパ以外の民族集団がみな白い貫頭衣を着て，臙脂色の模様入りの上着を共有していることである。モンパは臙脂色でエリ・シルクの貫頭衣を着る点が異なっている。ハイメンドルフやナイールが示しているような権力関係が，衣服の選択に何らかの影響を与えているのではないだろうか。筆者は，かつて自分たちから収奪を繰り返していた非モンパの「野蛮性」を象徴する一枚布の衣服ではなく，仏教徒であるモンパやシェルドゥクペンの貫頭衣をこれらの民族集団が選択した可能性があると考えている。アカの衣服がかつての一枚布から貫頭衣に変わったことが事実であれば，その可能性は高いと考える。

さらに，モンパは臙脂色のシンカを着用することで，白だけの貫頭衣を着るほかの非モンパ集団との差異化を図ったと考えられるが，このことに関連して，さらにもう一つのモンパの独自性として腰当て布にも注目したい。

写真13　縞柄の腰当て布（ディラン，西カメン）。

写真14　腰当て布を着けていないパンチェン・モンパ（ゼミタン・タワン）。

3-5.　腰当て布が表象するもの

井関は，「集団内での規約をこめて成り立つ民族衣装も，ほかの民族集団にとっては，その群れを包む布に過ぎない。それは，単に他集団と区別することのできる社会的記号（制服）となる」と述べている［井関 1997: 209–210］。実際には布にはさまざまな意味が込められているにもかかわらず，ほかの集団には重要にはみえないということは確かにある。モンパの衣服の場合には，それがシンカを着用する際に必須となる尻を覆う「腰当て布」なのではないか。床や地面に座る際の座布団代わり，あるいは汚れ防止といった機能的側面だけで説明されてきた腰当て布にもこうした集団内の規約が隠されていて，それ自体が，他集団との区別のための記号となっていると筆者は考えている。腰当て布は，モンパだけが着けるのである。これまでのモンパに関する報告では，その重要性は無視されてきた。

シンカを着るときに帯を締めるが，そのときに欠かせないのが，尻の部分を覆うように着用するエプロンのような布である。チベットの既婚女性はパンデン(*pangden*)というカラフルな横縞の細い布を三枚はぎにしてつないだエプロンを前につけるが，モンパは同じような布を前ではなく尻の部分を覆うように後ろにつける。幅はエプロン用のものよりもやや広い。ディランやカラクタンではこの横縞の布を着用するが，自分たちで織った赤い厚手のウール地をつける場合が多い。腰当て布の呼称は，地域によって異なる。タワンではこれらウール製の腰当て布の多くは赤い色で，黒い色のものを着けることもあるが，ブータンのメラとサクテンではすべての女性が例外なく黒の腰当て布を着けている。彼らは，絶対にほかの色の腰当て布は着けない。これは，地域性の表れであると同時に，彼らが「モンパ」あるいは「ダクパ」と呼ぶアルナーチャル・プラデーシュ側のモンパとの差異化を示すためであろう。ルブランでもサクテンから嫁いできた女性たちは，黒色の腰当て布を着けているが，その子どもや孫たちの世代は，色にこだわりはない。

腰当て布は，シンカを着る場合に日常着か晴れ着か，既婚，未婚を問わず[54]，小さな子ども老婆も欠かしてはならない必須の衣装である。防寒用として，また自宅の木床や農作業，寺院の法要で地面や床に座り込むときなど座布団の代わりをし，シンカの汚れを防ぐという機能的側面は確かにある。しかし，それだけからでは，この腰当て布を説明することはできない。地面に座る必要のない室内でのパーティーや民族舞踊の衣装となる場合にも必ず着用し，完全にシンカの帯の一部となっている。

写真15　小牛の皮を背中につけたパンチェン・モンパ（ゼミタン・タワン）。

腰当て布を着けずに人前に出ることは「とても恥ずかしい」というのが多くのモンパ女性が共通して口にすることであるが，その理由を聞いても明確に答えられる人はいない。この布のことを話題にすると，まるで下着の話でもするかのように赤面して家に引きこもってしまう女性もいる。最近になって町に住むモンパ女性は商店で売るようになった洋装の下着をつけるようになったが，以前はシンカの下にはまったく下着を着けていなかったという。シンカを着たときに前面にはギャザーがあるが腰部にはないので，身体の線が露骨に出ないようにするためではないかと答えるディランの女性もいた。その女性は，以前は生理用品などもまったくなかったので，経血がにじむのを防ぐためという理由もあったと語っていた。

モンパの中で，例外的にこの腰当て布をすることにこだわらないのは，ゼミタンのパンチェン・モンパであることを2005年にほかの地域のモンパから聞かされていた。2009年3月にゼミタンのゴルサム・チョルテンで催された法要には西カメンやタワン各地から大勢の人々が正装して集まっていたが，その群集の多くは赤や縞柄の腰当て布をしているのに対し，まったく着けずに尻の部分を出しているパンチェン・モンパの姿があった。会場は野外で，地面には多少の草は生えているものの，そのままあぐらをかいて座るならば腰当て布があったほうが好都合である。しかし，すべてのパンチェン・モンパが腰当て布を着けていないわけではなく，着けている人のほうが数のうえでは多いようにみえた。腰当て布を着けているパンチェン。モンパは，帽子をかぶっていないとタワンの人々と区別することは難しい。

チベット側の勒布区の門巴族とパンチェン・モンパが同じ帽子をかぶっていることは前にも触れたが，中国の資料に掲載された写真の女性は，日本の着物と同じような形状のウール製の上着の腰の周囲に白いウール布をスカートのようにぐるりと巻き，子牛の皮を肩から腰にかけて背負っている。この子牛の皮は，ゼミタンでもごく少数ではあるが，レウを着た女性が掛けているのを確認している。パンチェン・モンパは腰当て布をしないのではなく，もともと子牛の皮がその役目をしていた可能性がある。パンチェン・モンパは，これを雄のヤクと雌のゾモ[55]の間にできたトゥイの皮であるという。トゥイは，この地域では商品になる母親のミルクを飲んでしまうため生後1カ月で殺されその皮はバターやチーズの包装に使われている。

勒布区の女性が背負う子牛の皮の説明で興味深いのは，小さな子どもから老女まで全員がこれを背負うということと，婚礼や祭日などの際には新しく替えること，そして唐の文成公主にまつわる伝説である。文成公主がチベットに降嫁したときに，しばらく門隅にとどまり，門巴族に耕作の仕方を教えた

が，そのときに彼女が魔除けのためにこの子牛の皮を背負っていたのを門巴族の女性がまねたという内容である［Yu 1995: 439］。生後間もなく殺された子牛の皮が「魔除け」とされていることになるがその理由はまだ不明である。仮説的にいえるのは，先述のようにパンチェン・モンパはもともと狩猟民であったため，獣皮の腰当てを着けていたものが，生業の変化とタワン・モンパへの同化からシンカと腰当て布に変わったのではないかということである。

腰当て布が機能性だけで語られるならば，モンパ以外に貫頭衣を民族衣装としているシェルドゥクペン，ブグン，ミジ，アカが腰当て布をしていない理由を説明できない。住宅の基本構造はモンパと変わらず，木床や地面にあぐらをかいて座ることは共通しているので，機能性だけを考えれば腰当て布はやはりあったほうがよいはずである。白い貫頭衣を着ている彼女たちにはなおさらである。

モンパだけが臙脂色のエリ・シルクのシンカを着て，腰当て布をすることは，モンパのアイデンティティの表象であるからといってよいだろう。同じく腰当て布をするブロクパも黒い色にこだわることによって「ブータンのブロクパ」としての地域性によるアイデンティティを主張しているとみることができるだろう。逆に腰当て布をしない人たちは，モンユルの共通衣服としての貫頭衣や上着は着るが，腰当て布は先住民とみなされるモンパの表象であるためあえてしなかったと考えられないだろうか。チベット系とほかの民族集団の間にあって，モンユルの地に古くから住んでいたと考えられるモンパは，自らの独自性を表象する衣装をつくり出してきた。その素材は外部から取り込むいわば権威付与あるいは威信財としてのエリ・シルクで，ラックを使った臙脂色という着色によって独自の貫頭衣たるシンカをつくり出し，腰当て布を組み合わせた可能性がある。

こうした差別化の表象は，シェルドゥクペンの場合であれば，横幅がモンパのシンカの倍もあるたっぷりとしたドレスであることと大きなスカーフをマントのように首のところでゆったりと結ぶことにもみえる。アカの場合には，筆者はみたことがないが儀礼のときには毛布を肩から掛けて普段着との差をつけるという［Sinha 1988 (1962): 28］。昔の写真をみると，頭に金属のヘアバンドをしているのはアカの特徴であることがわかる。その影響はミジの衣服にもみられる。モンパと同じ白いシンカを着て，臙脂色のトゥドゥンを着たとしても，腰当て布をせずに代わりにヘアバンドをするなどの差異化を図っていることがうかがえる。それぞれの民族集団が，隣接する人々との関係性に応じて独自の表象をつくり出したのであり，それは，ローカルポリティックスの表れでもあった。

4.　おわりに

本稿では，チベットと周辺民族との間にモンパを位置づけ，三層からなる民族集団の中間にあるモンパの民族衣装が，現在の国境や州境を越えた周辺住民との歴史的な交渉によってもたらされ，変化してきたこと，貫頭衣という衣服の形状が，モンパだけではなくその隣接する民族集団にもみられること，そしてその集団との差異化に腰当て布が重要な役割を果たしていることを示した。モンパの事例は，民族的境界を衣装によって可視化して示すものとして考えられるかもしれない。

インドの指定トライブとしてモンパとされた人々も，内部は言語や生業，本来の出身地などの違いによって細分化されているが，民族衣装と言語や生業その他の属性とは必ずしも一対一の対応をみせてはいない。モンパの中には，ゼミタンのパンチェン・モンパのようにまだ50年たっていない移民あるいは難民ともよべる人々も含む集団や，ブータンから移住してきたルブランのブロクパ，かつてはチベット人と呼ばれていたマゴウ・モンパ，そして言語を異にするさまざまな集団が含まれている。このよう

な少数集団がかつての衣服を離れ，多数派のモンパの衣服や腰当て布を着用するようになっている過程を目にすると，民族衣装がその属性の違いを「隠す」包摂作用を持つことに気づかされる。

衣服は，地域社会での相対的な力関係において政治や経済との関係性や，文化的ヘゲモニーを示す他文化との接触によっても変化し，モンパ自身も，非モンパ集団との軋轢の歴史過程の中で，自己表象のために現在の衣服を主体的に選択したと考えられる。この衣服がチベットから替わったインドという国家とのつながりの中で，どのように変化していくのかにも注目したい。

本稿の考察は，資料や調査がまだ十分ではないが，この10年で現地の状況も大きく変化してきている中で，変化しやすい衣服について現時点でわかっていることをまとめ，検討した。

モンパの中の少数グループと優勢なグループ相互のせめぎあい，隣接するほかの民族集団との表面化しない社会関係なども，衣服の変化を通して明らかにすることが可能であると考えているが，これらは今後の課題として調査を続け，理論的な裏づけをして研究を深めていきたい。

注

1) 第一次イギリス・ビルマ戦争(1824–1826)の後，イギリスは茶園経営を主目的としてアッサムを統治するようになったが，周辺の山岳地帯は「野蛮な種族」が住む辺境地帯とみなされていた。1882年から1943年の間，現在のアルナーチャル・プラデーシュにあたる地域は4つの辺境地域(Frontier Tract)に分けられていた。インドの独立後，1950年にインド憲法が施行されたときにもまだ「辺境地域」としてアッサム州知事の管理下にあった。この状態は，1954年にすべての辺境地域が北東辺境管区(North-East Frontier Agency: 通称NEFA)としてアッサムから独立するまで続いた。NEFAは，1972年にアルナーチャル・プラデーシュの名で中央政府直轄地となり，1987年に正式に州に昇格して現在に至っている。アッサム，ナガランド，マニプル，ミゾラム，メガラヤ，ミゾラムを加えた7つの州は，インド北東部の「セブンシスターズ」とも呼ばれている。
2) たとえば，［栗田 1989: 69］は，［Elwin 1959a: 192］の写真を参考にこの推測をしている。アルナーチャル・プラデーシュがさまざまな制限を設けながらも外国人観光客の入域を受け入れたのが1992年，タワンは1998年であるので，ブータン側の一般に開放された地域での観察や当時の限られた文献に頼らざるを得なかったことからこの推測が生まれたことは理解できる。外国人がアルナーチャル・プラデーシュ州に入域する場合には，インド査証以外に特別制限地域入域許可書(Restricted Area Permit)と入域許可料が必要で，滞在期間にも制限がある。制限は次第に緩和され，筆者が最初に訪問した1995年当時，最長10日だったものが後に1カ月に延長された。2008年秋からさらに緩和されて所定の費用さえ支払えば長期間の滞在も許されつつある。
3) ボガトゥイリョフは，「衣服を身につける者がその衣服を別の民族から区別する記号の一つとみなしている場合には，衣服の地域を示す機能は，民族を示す機能と混ざり合う」としている［ボガトゥイリョフ 2005: 71–73］。岡光は，インドにおいて衣服は身体を包み隠すだけでなくそれを着る者の属性を表す標識としての重要な機能があると指摘している。「属性」とは，性別，カースト集団，地域的帰属，人生の段階（既婚か未婚かなど）などで，その着方によって集団の差異化を図る場合もある。インド人は，何を着るか，どのように着るかによって自らが属する地域や集団を明示的に表してきた。サリーの色の選択には，個人の好みや流行に加えて，文化や地域の持つ豊かな伝統とシンボリズムが色濃く反映されているという［山下 2007: 85–87］。これらの指摘に異論はないが，他文化との接触によって民族衣装が変化する場合もあり，同じ衣服を着ているからといってその民族の「属性」が同じで，不変であるとは限らない。この点については，本論で述べる。
4) ［Elwin 1959a: 49–54, 82］を参照。
5) ［Ghosh & Ghosh 2000］のアッサムおよびアルナーチャル・プラデーシュの織物についての記述など。
6) ［Myers & Bean 1994］，［Aris 1980, 1994］，［Pommaret 1994, 1997, 2000, 2002］。
7) ［Pommaret 2002］によって，複雑な東ブータンとアルナーチャル・プラデーシュのモンパ，およびアッサムとの交易などがよくわかるものとなった。
8) たとえば［Pommaret 2002: 183］のディランやカラクタンのモンパの衣服の説明など。
9) 指定トライブ(Schedule Tribes)は「インド共和国憲法において，高等教育・公務員職・議会における留保措置

の対象とされているトライブ」のこと［藤井 2007: 72］。藤井はトライブを「ヒンドゥー教やイスラーム教といった大宗教に属しておらず，固有の文化を保持しているとされるコミュニティ。インド社会が宗教徒集団によって構成されているとみなしたイギリス植民地期のインド社会観に淵源をもつ」と説明している［藤井 2007: 40］。しかし，「少数民族」は中国の行政用語でもあるため，本稿では，その使用を避け，「指定トライブ」「トライブ」という用語をインドの行政用語としてカタカナ表記で使用する。

10) 押川の「行政用語として『部族』という語が今日も使われているが，その一応の基準とされている孤立性，後進性，独自の文化伝統のいずれをとっても絶対的なものではなく，多くの少数民族集団は平地の一般社会と何らかの関係を結びつつ内部に分化が生じている」［押川 1995: 34］という指摘はモンパにも当てはまる。

11) 布と衣服研究の動向については，［金谷 2007, 2009］が簡潔にまとめている。

12) 標高は標識のあるセ・ラ以外は筆者の高度計による。

13) 1914年のシムラー会議でイギリスとチベットの代表の間で合意した国境だが，中国はこれを認めず，北西部のジャンムー・カシュミール州のアクサイチンとともにその領有を主張し，1962年の中印国境紛争の一因となった。現在でも中国の地図では，アルナーチャル・プラデーシュの大部分は中国領として表記されている。

14) ダライ・ラマ6世に関しては，［Aris 1989］や今枝由郎訳の『ダライ・ラマ6世恋愛彷徨詩集』［ツァンヤン・ギャムツォ〈ダライ・ラマ6世〉2007］に詳しい。

15) アルナーチャル・プラデーシュへの他州からの人々の入域にはインナーライン・パーミット(Inner Line Permit)と呼ばれる許可書の所持が必要で，永住は原則として認められていない。

16) ［井上 2008: 61］

17) 州全体の食糧のための耕作可能な土地は5%にすぎない［Gaur & Rana 2008: 214］。

18) 2009年3月の筆者の調査では，たとえば，ディラン近くのラマ・キャンプの30軒の商店のうち，モンパが経営しているのは9軒で，ほとんどはビハール（12軒）など他州出身者が商店主であった。

19) アカはモンパやアッサムの人々からの他称であるが蔑称でもある。自称はフルッソ(Hurusso)であるが，参考文献のほとんどがアカと記しているため，本稿でもアカを使用する。

20) 現在はモンパも彼らをブグンと呼んでいるので，本稿では「ブグン」に表記を統一した。コワ(Khowa)は蔑称である。

21) 2001年センサスによる西カメン県の人口は74,595人，タワン県は34,705人で，指定トライブの割合はそれぞれ49.5%と75%である。

22) アルナーチャル・プラデーシュおよびブータンの言語については現地調査によるものと［Driem 2001］を参考にした。

23) 2001年センサスには各集団の数は示されていない。1981年センサスでは各モンパ集団の人口は，タワン6,503人，ディラン3,599人，カラクタン8,000人，リシュ1,567人，ブトゥ348人，チュグのみ1971年センサスにより483人であるという［Singh 1995: 218–247］。ルブランの人口は，2005年の筆者の調査時は295人。

24) ［Nath 1993］参照。

25) 現実的には，道路整備の遅れやホテル不足，アッサムの治安悪化などさまざまな問題が蓄積し，観光促進事業は順調ではない。

26) Arunachal Tourism のホームページ http://www.arunachal Tourism.com/people.htm には，顔に入れ墨をしたワンチョ(Wancho)の男性や円形の黒い木の鼻栓をしたアパ・タニ(Apa Tani)女性などが使われている。

27) ［Baldizzone 2000］など。

28) lacは「10万」を意味するサンスクリット語のラクシャ(laksha)，ヒンディー語のラック(lakh)起源の英語である。学名*Laccifer lacca*のメスがこの排泄物を出す［クラウセン 1972: 79–80］。モンパは「ラー」，あるいは「ツォース」と呼んでいる。

29) エリ・シルク糸をつくるためのカイコの原産地はアッサムで，日本では「エリ蚕（サン）」と呼ばれトウゴマの葉で育つので「蓖麻蚕（ヒマサン）」の別名がつけられた。日本にはほかにも樗蚕（チョサン）というヤママユガ科，サミア(samia)属の昆虫が古くから生息していて，明治になってからシンジュサンと命名されたが，エリサンはこのシンジュサンの亜種と考えられている［伊藤 1992: 497–527］。

30) ブータンのブロクパには「赤が魔除けの色である」や「僧侶の衣の色と同じだから」などの言説もあるが，モンパにはそのような意識はないようである。

31) ナイール(P. T. Nair)はかつてアカがモンパから貢物をとりたてていた時代に「マゴウのチベット人からもとりたてていた」と書いている［Nair 1985: 71］。
32) 中国国境に近く1959年のダライ・ラマ14世のチベット脱出の際のルート上にある。
33) ゼミタンの役所で調べた。
34) ［西岡・西岡 1978: 150］，［Myers 1994b: 189］を参照。
35) ブータンとインドの国境の町サムドゥップ・ジョンカル(Samdrup Jongkhar)にあるバザールで，現在でもモンパやブロクパ向けにシンカ布が売られている。
36) 日本で地機(じばた)と呼ばれているもので，たて糸の端を織り手の腰で引っ張り，よこ糸を打ち込んでいく原始的な織具である。モンパの男なら誰でも木を削って簡単につくることができるという。織っているときの布の側面からの形状から，「三角後帯機」とも呼ばれる。使用しないときには折りたたんでしまうこともできる。家によっては，腰を掛けて足でペダルを踏む高機(たかばた)のある家もあるが，こちらはそれほど多くはない。自分ではつくることが難しく高価であることと，地機のように折りたたむことができないのでスペースをとるためであろう。
37) モンパが織っているとしているものが多い。たとえば［National Institute of Fashion Technology 1998: 20–21］や［Pommaret 2002: 183］など。ハイメンドルフは，自分がみたタワンのモンパの衣服について書いている。そこにはシャツとスカートに使われるイチゴ色に白い縞の入ったウールの布はブータンの生地であると書かれている［Fürer-Haimendorf 1982: 171］。前後の内容からシンカのことを書いているようなので，ウールはエリ・シルクの間違いであろう。エルウィンは，モンパ女性がショール，帯，人物や動物柄の上着をつくると書いているが，かなりの布がチベットやブータンから輸入されているとしている［Elwin 1959a: 68］。
38) シャルチョッパは文字どおりには「東部の人」を意味する。ブータン東部に住む多数派の住民で，彼らの言語は，ツァンラ語である。ディランやカラクタンのモンパ，中国の墨脱・門巴族の言語もツァンラ語とされる［Driem 2001: 987–993］。
39) サクテンとメラには，チベット南部の錯那（ツォナ）から女神ジョモに導かれてこの地へやってきたという伝説がある。サクテンとメラの間の険しい峠を越えられた健脚で体力のある人々だけがメラに住みついたという内容である。メラの人びとはそのことを大変誇りにしているが，織物，刺繍，ヤクの毛の帽子づくりなどにも長けている。筆者は，特別許可を取得して，2006年から3年間毎年約1ヶ月調査を続けている。
40) 筆者がメラで調査を行ったときに，その場所を村人に案内してもらった。
41) 現在のブータンの国教となっているドゥック派（カーギュ派の支派の一つ）のことである。
42) ［Sarkar 1981: 8–10］にも同様の記述がある。タワン僧院の創建は1680年頃とされている。
43) ラブハもボロ・カチャリもアッサムの指定トライブである。モンパの話では，いずれも織物技術に長けているという。
44) かつてはウール製の貫頭衣を着ていたというが実物は現地には残っていない。現在のシンカを着はじめた時期については，郊外のナムシュ村の当時最高齢の95歳の女性から聞いた話が最も古い。1930年ごろ，一枚のシンカにチベット銀貨40枚で支払いをしたことまでよく覚えていた。ほかの複数の高齢者がかつてはウール，後に白い木綿やエリ・シルクのシンカであったことを認めているが，その具体的な年代まではわかっていない。
45) ［西岡・西岡 1978: 152–156］に1964年当時のダクパの様子が記録されている。
46) 1914年にG. A. Nevill，1938年にG. S. Lightfootらの軍人が率いる調査隊がタワンに派遣されている［Osik 1999: 100–108］。
47) ［Pandey 1996: 4］による。
48) 出典は，Ethnological Report (Shillong, 1914). P. 5とあるが，この資料はまだ入手できていない。
49) 1914年に国境をめぐる中国の動きに神経をとがらせていたイギリス植民地政府は，ネヴィル(Captain Nevill)を隊長としたタワンへの使節団を送るが，そのときに同行したのが軍医のケネディであった［Osik 1999: 100–101］。アカ・プロムナードは1913年から1914年とされているので［Elwin 1959b: 438］，アカの地を訪問したのはタワンへ行く途中のことであったと思われる。
50) 指定トライブとしては，ニシ(Nishi)に包括されている。東カメン県に住むが，ミジなどとは隣接している。
51) これらの民族集団間の権力関係について1980年に西カメンとタワンを訪問したハイメンドルフが興味深い記述をしている。アカは，より優勢な勢力を持ったバンギに脅され，貢納を行っていたが，それはほんの一世代前の話であるという。アカ自身は，その分をシェルドゥクペンやブグンなどから取り返していたが，同じよ

うにミジもバンギから襲撃を受けた分をシェルドゥクペンに要求することでバランスをとっていた。ブグンは，外婚制をとり，モンパよりもニシ(Nishi)との関係が強いことが示唆されるが，長い間のシェルドゥクペンとの関係から，当時仏教徒になる傾向があり，僧になる少年も出てきていたという［Fürer-Haimendorf 1982: 147–148］。

52) メンバ(Memba)はモンパとして指定トライブに分類されていたこともあるが［Singh 1998: 2278］，現在は別にされている。メンバもモンパと同じく「モンユルの住民」という意味で，ディランやカラクタンのモンパと同じツァンラ語を話す人々である。メンバについては稿を改めて書くつもりである。

53) ブータンのクルテ地方の古い時代の赤色のシンカはレウ・シンカと呼ばれという［Myers 1994a: 114–115］。

54) チベット女性のエプロンと混同して，「既婚女性が着用する」と間違った説明を書いている写真集がある［National Institute of Fashion Technology 1998: 25］。その写真に写っている子どもも腰当て布をしているので記述に矛盾がある。

55) ヤクにはさまざまな現地名があるが，たとえば，ルブランでは雄のヤクはヤク，雌のヤクはチュック，雄牛とチュックの交配種をゾモと呼ぶ。

引用・参考文献

Adams, Barbara. S., 1984. *Traditional Bhutanese Textiles*. Bangkok; White Orchid Press.

Aris, Michael, 1980. *Bhutan: The Early History of A Himalayan Kingdom*. New Delhi: Vikas Publishing House.

——— 1989. *Hidden Treasures and Secret Lives : A Study of Pemalingpa (1450–1521) and the Sixth Dalai Lama (1683–1706)*. London: Kegan Paul International Limited.

——— 1994. Textiles, Text, and Context : The Cloth and Clothing of Bhutan in Historical Perspective. In *From the Land of the Thunder Dragon: Textile Arts of Bhutan*. Diana K. Myers and Susan S. Bean (eds.). pp. 23–45. New Delhi: Timeless Books.

Ashi Dorji Wangmo Wangchuck, 1999(2004). *of Rainbows and Clouds.: The Life of Yab Ugyen Dorji as told to his daughter*. New Delhi: Bookwise [India].『虹と雲―王妃の父が生きたブータン現代史』今枝由郎監修，鈴木佐知子・武田真理子訳，平河出版社.

Baldizzone, Tiziana & Gianni Baldizzone, 2000. *Tribes of India*. New Delhi: Bookwise.

Barnes, R. & Joanne B. Eicher (eds.), 1992. *Dress and Gender: Making and Meaning in Culture Contexts*. Oxford: BERG.

ボガトゥイリョフ，ピョートル・グリゴリエヴィチ，2005.『衣装のフォークロア』増補・新訳版，桑野隆・朝妻恵里子（編訳），せりか書房.

Cooper, Edgar, 1933. Bhutan: Tailed People. 'Daktas' People with a Tail in the East Himalaya. In *Man*, Vol. 33, pp. 125–128. Anthropological Institute of Great Britain and Ireland.

Driem, George van, 2001. *Language of the Himalayas: An Ethnolinguistic Handbook of the Greater Himalayan Region*, Vols. Ⅰ & Ⅱ. Leiden; Boston; Köln: Brill.

Eicher, Joanne B. (ed.) , 1995. *Dress and Ethnicity: Change Across Space and Time*. Oxford: BERG.

Elwin, Verrier, 1968(1958). *Myth of the North-East Frontier of India*. Shillong: North-East Frontier Agency.

——— 1959a. *The Art of the North-East Frontier of India*. Shillong: North-East Frontier Agency.

Elwin, Verrier (ed.), 1959b. *India's North-East Frontier in the Nineteenth Century*. Bombay: Oxford University Press.

藤井 毅，1988.「インド国政史における集団：その概念規定と包括範囲」『南アジア現代史と国民統合』佐藤 宏（編），pp. 23–103，アジア経済研究所.

——— 2007.『インド社会とカースト』世界史リブレット86，山川出版社.

Fürer-Haimendorf, Christoph von, 1982. *Highlanders of Arunachal Pradesh: Anthropological Research in North-East India*. New Delhi: Vikas Publishing House.

ゲイト，エドワード，1945.『アッサム史』（民族学協会調査部訳），三省堂. Edward Gait (1905)1967. *A History of Assam*. Reprint. Calcutta: Thacker Spink & Co.

Gaur, K.D & Rachita Rana, (2008. A Note on Economic Development of Arunachal Pradesh. In *Economy of Aru-*

nachal Pradesh. Manish Sharma (ed.), pp. 208–215. Guwahati: DVS Publishers.
Ghosh, G.K & Shukla Ghosh, 2000. *Textiles of North Eastern India*. Calcutta: FARMA KLM.
井上恭子，2008.「2 ナガ：辺境における民族アイデンティティの模索と闘争」『講座世界の先住民族：ファースト・ピープルズの現在』03　南アジア．綾部恒雄（監修）・金基淑（編），pp. 53–72，明石書店.
井関和代，1997.「デザインと製作」『「もの」の人間社会』岩波講座文化人類学3, pp. 205–231，岩波書店.
伊藤智夫，1992.『ものと人間の文化史』68-II，絹II，法政大学出版局.
金谷美和，2007.『布がつくる社会関係―インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌』思文閣出版.
――― 2009.「衣服という表象」『文化人類学事典』日本文化人類学会編，pp. 72–75，丸善.
小泉潤二，1996.「現代マヤの衣装と政治―グアテマラの場合」大阪大学人間科学部紀要．22: 321–339.
クラウセン，W.ルーシー，1972.「昆虫と人間」2．みすず科学ライブラリー，小西正泰・小西正捷訳，みすず書房.
栗田靖之（編），1989.『北東インド諸民族の基礎資料』『国立民族学博物館研究報告』別冊9，国立民族学博物館.
Laskar, N. K. (ed.), 2001. Provisional Population Totals, Paper-1. In *Census of India 2001: Series 13*. Shillong: Director of Census Operations, Arunachal Pradesh.
Myers, Diana K., 1994a. Women, Men, and Textiles. In *From the Land of the Thunder Dragon: Textile Arts of Bhutan*. Diana K. Myers and Susan S. Bean (eds.), pp. 81–141. New Delhi: Timeless Books.
――― 1994b. Fibers, Dyes, and Looms. In *From the Land of the Thunder Dragon: Textile Arts of Bhutan*. Diana K. Myers and Susan S. Bean (eds.), pp. 187–202. New Delhi: Timeless Books.
Myers, Diana K. & Francçise Pommaret, 1994. Bhutan and Its Neighbors. In *From the Land of the Thunder Dragon: Textile Arts of Bhutan*. Diana K. Myers and Susan S. Bean (eds.), pp. 47–69. New Delhi: Timeless Books.
Myers, Diana K .& Susan.S.Bean (eds.), 1994. *From the Land of the Thunder Dragon: Textile Arts of Bhutan*. New Delhi: Timeless Books.
Nair, P. T., 1985. *Tribes of Arunachal Pradesh*. Guwahati: Spectrum Publications.
Nath, Ashok, 1993. Arunachal Pradesh: Hidden land in the hills. In *Discover India, 6(5)*. Hong Kong: Media Transasia.
National Institute of Fashion Technology, 1998. *Textiles and Crafts of India: Arunachal Pradesh · Assam · Manipur*. New Delhi.
西岡京治・西岡里子，1978.『神秘の王国～ブータンに“日本のふるさと”を見た夫と妻11年の記録』学習研究社.
押川文子，1995.「序章　独立後の『不可触民』―何がどこまで変わったのか『フィールドからの現状報告』叢書カースト制度と被差別民第5巻，押川文子（編），pp. 19–35，明石書店.
Osik, N. N., 1999. *Modern History of Arunachal Pradesh (1825–1997)*. Itanagar/New Delhi: Himalayan Publishers.
Pandey, B. B., 1996. *The Buguns: A Tribe in Transition*. Itanagar/Delhi: Himalayan Publishers.
Pommaret, Francçise, 1994. Bhutan and Its Neighbors. (with Myers Diana K.) In *From the Land of the Thunder Dragon: Textile Arts of Bhutan*. Diana K. Myers and Susan S. Bean (eds.). pp. 47–69. New Delhi: Timeless Books.
――― 1997. Ethnic Mosaic: Peoples of Bhutan. In *Bhutan: Mountain Fortress of the Gods*. Christin Schicklgruber & Françoise Pommaret (eds.), pp. 43–59. New Delhi: Bookwise.
――― 2000. Ancient Trade Partners: Bhutan, Cooch Bihar and Assam (17th–19th centuries). In *Journal of Bhutan Studies* 2(1), pp. 30–53. Thimphu: The Center for Bhutan Studies.
――― 2002. Weaving Hidden Threads: Some Ethno-historical Clues on the Artistic Affinities between Eastern Bhutan and Arunachal Pradesh. In *The Tibet Journal*, 27(1&2): 177–196. Dharamsala: Library of Tibetan Works & Archives.
Rai, M. B., 1982. Primary Census Abstract for Scheduled Caste and Scheduled Tribes. In *Census of India 1981, Series-25, Paper-2, Arunachal Pradesh*.
Rao, V. M., 2003. *Tribal Women of Arunachal Pradesh*: Socio-Economic Status. New Delhi: Mittal Publications.
Sarkar, Niranjan, 1980. *Buddhism Among the Monpas and Sherdukpens*. Shillong: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh.
――― 1981. *Tawang Monastery*. Shillong: Director of Reserch, Government of Arunachal Pradesh.

Sharma, R. R. P., 1988(1960). *The Sherdukpens*. Itanagar: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh.

Singh, K. S. (ed.), 1995. *Arunachal Pradesh: People of India Volume XIV*. Calcutta: Anthropological Survey of India / Seagull Books.

——— 1998. *India's Communities: People of India, National Series Vols. V, VI, VII*. Delhi/Calcutta/Chennai/Mumbai: Anthropological Survey of India/Oxford University Press.

Sinha, Raghuvir, 1988(1962). *The Akas*. Itanagar: Director of Research, Government of Arunachal Pradesh.

杉本星子，2002.「ファッショナブル・インディア」『季刊民族学』99: 36–51.

鈴木清史・山本誠（編），1999.『装いの人類学』人文書院.

Tarlo Emma, 1996. *Clothing Matters: Dress and Identity in India*. Chicago: Univ. of Chicago Press.

ツァンヤン・ギャムツォ（ダライ・ラマ六世），2007.『ダライ・ラマ六世　恋愛彷徨詩集』今枝由郎訳，トランスビュー.

ワイナー，アネット.B ＆ジェーン，シュナイダー（編），1995.『布と人間』佐野敏行訳，ドメス出版.　Annet B. Weiner & Jane Scneider (eds.), 1989. *Cloth and Human Experience*.

山下博司，2007.「衣」の伝統的意義と役割『インドを知る事典』山下博司・岡光信子（編），pp. 80–94，東京堂出版.

于　乃昌(Yu Nai Chang)（編），1995.「門巴族」『中国民族文化大観』関　東昇（編）pp. 355–496，北京：中国大百科全書出版社.

張　江華(Zhang Jian Hua)，1997.『門巴族』中国知識叢書　北京：民族出版社.